
幸福の刹那に

凜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福の刹那に

【著者名】

ZZマーク

Z2531F

【あらすじ】

幸せそうな家族は、あくまで幸せそうなだけであつて……。目に見えるものが全てだと、あなたは言い切ることができますか？眞実は時にとんでもないところにあるものなのかもしれません。

凜花

空には誰かの食べ残しのような匂が浮かんでいる。その頬りない月明かりの下を茉由子はゆっくりと歩いていく。

恋人の貴之が一人暮らしをしているアパートからの帰り道。いつもなら彼の自転車の後ろに載せて送つてもらつたが、今日は風邪をひいた貴之の看病をしに行つた帰り。ようやく眠りについた彼を起こさないようにそつと部屋を抜けてきたのだ。

暦は十月に入り、夜になるとどこからともなく秋の空気が降りてきて町全体を丸く包み込む。そのままにいるような湿った匂いを感じながら、茉由子は今日あつた些細なあれこれを思い出していた。

どうつてことはない、食欲のない彼のために梅のお粥を作り、それを少しずつ冷ましながら食べさせ、寝付くまで頭を撫でていただけなのだ。ただそれだけのことなのに、そのひとつひとつが特別なことだったように感じられるから不思議だ。

茉由子はその、彼のことをゆっくりと思い返していく時間をとても愛おしく感じていた。どんなに小さな幸せも、噛み締めることでその何倍もの幸福感で心を満たしてくれるような気がするのだ。

同じ大学で一つ年下の彼のアパートは、たまたま茉由子が通つていた小学校の近くにあつた。懐かしいこの道を通ると、茉由子はあの頃の何かを取り戻せる気がする反面、自分が失つたかもしれない何かに気づいてしまいそうで空恐ろしくもなる。

細くうねつた道に沿つて、ぼんやりと家々の灯りが灯つていて。小学生の頃は下校中にどこからともなく夕飯の匂いが漂つてきたりしたが、今は全てが夜に沈み込んでいるようだ。町全体が夜の気配にそつと耳を傾けている、そんな気がした。

田舎と呼ぶには縁が少なすぎるが、都会と呼ぶにはあまりに閑散としきぎていてこの辺りは、夜十時になると人通りがほとんどない

くなる。今夜も白い犬のリードを引いているおばさんとすれ違ったきりで他に人の気配は感じられない。パンクを直してもらつたことがある自転車屋も、よくアイスの特価を買いに行つたスーパーも、毎日きつかり百円だけ握り締めて通つた駄菓子屋も、今はシャツタ一が閉じられてひつそりとしている。

子供の頃には見ることのできなかつたこの町の、あるいはそこにあるあらゆる店の夜の顔。それらを眺めていると、なんだか自分が何か見てはいけない部分を覗き込んでいるような気がしてくる。

たぶん、町でも人でも何でも、普段見ない一面を見るというのは落ち着かないことなのだろう。だからか、強引で少しも年下らしくない彼の今日のように弱つた姿は私をひどくそわそわさせた。それは不快感などでは決してなくて、甘つたると少しの不安が混じつたような奇妙な感覚だつた。

信号が赤に変わって、彼女は大通りと、この辺りでは呼ばれているが一車線しかないの信号の前で足を止めた。他に信号を待つてゐる者はいない。

田の前を時たま滅茶苦茶なスピードで走り抜けていく車と競い合うかのように、強めの風が夜空に向かつて吹き上げていつた。茉由子はトレンチコートの前を両手で閉め合わせ、何気なく道路の向こう側のマンションを見上げた。九階建てのそのマンションの四階には小さな公園があり、みんなのちよつとした遊び場になつていた。茉由子もよく放課後にお菓子を買い込んで友達と通つたものだ。

ここに屋上へと続く階段には鉄格子のような扉があつて、そこには大げさすぎるほど頑丈に鍵がかけられていた。そのせいなのかそれとも真実だったのか、私たちの間では昔誰かがそのマンションの屋上から飛び降り自殺をしたという噂が回つていた。

そんなことを思い出しながらマンションを眺めていると、視界の端で何かが動いた気がした。田を凝らしてみると五階の角部屋のベランダに人影が見えた。往来する車のヘッドライトと弱弱しい街灯しか明かりのないうつすらとした闇の中、かろうじてそれが男性と

女性、それに小さな子供であることがうかがえた。親子で夜更かしだろうか。

子供は父親にかかえられて、道路を行き交う車を眺めているようだ。

『パパ、あのクルマはなんていうの?』

こちらに向かつて指を差している子供からはそんな声が聞こえてきそうだ。和やかな家族の雰囲気に茉由子の口元には自然と笑みが浮かんでいた。

茉由子は信号を待つている間、その家族のあれこれを勝手に想像していた。今日は金曜日だからみんなで夜更かしをすることにしたのかな、それとも久しぶりに父親が家でゆっくりできるから子供が嬉しくてはしゃいでるのかな。

いつの間にか母親は自分自身に、父親は貴之に、そして子供はまだ見ぬ一人の子供にすり替わっていた。自分ではなく彼にそつくりの子供を想像してしまるのは何故だらう。彼の幼い頃にそつくりの男の子が欲しいな、なんて思つている自分がいる。

住む場所なんて小さくてもいいから温かい家庭にしたい。そして時々、あんな風に子供と三人で夜風に当たつてみたりするのだ。そんな平凡すぎるくらいの日々が、彼とならとてつもなく幸福に感じられるような気がした。

車の音が静まり信号が青に変わった。彼女は横断歩道を渡り終え、そしてもう一度、さつきの親子がいた部屋を見上げた。

子供がさつきよりも高い位置に持ち上げられている。その光景にさつきとは違つて違和感を覚えた。

『パパそんなに高くしたらこわいよ!』

『ほうら落としちゃうぞー』

そんな会話をしているのかもしれない。けれど、いくらなんでも危険すぎる。子供の足の位置はもはや落下防止用の鉄柵の高さを越えてしまっていた。言い知れぬ不安がどこからか這い上がつてくる。彼女の不安に拍車をかけるように、父親の手はゆっくりと前に突

を出されていった。

まさか 。

その“まさか”が一体、何に続くのか自分でもわからないまま、しかし茉由子は心の中に生まれつつあるはつきりとした恐怖を感じていた。

再び信号の色が変わり、止まっていた車がまばらに動き出す。そのヘッドライトに照らされて一瞬だけ浮かび上がった父親の表情を捉えたとき、茉由子は全身が粟立つのを感じた。

その瞬間、父親の手がそっと子供から離れ 。

(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございました。

この話は絵の具が垂れ落ちる瞬間を捉えたトリックアートのような写真からイメージしました。

絵の具の背景にある色と色の境田から幸せな菜由子と子供を殺そうとするほどの何かを抱えている家族との境界を、垂れ落ちる直前の絵の具からは今まさに落ちようと/or>する子供、それから菜由子の中で想像していた家族が幸福から不幸のどん底へ落ちていく瞬間を描いてみました。

書き終えた上で気になることば、

- 1、オチを予測できた
- 2、どこかで読んだことがあるような気がする

この辺りを重點的に、その他にも何か気づいたことや違和感などあれば遠慮せずに意見をください。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2531f/>

幸福の刹那に

2010年10月8日15時16分発行